BLEACH　the Free World

山人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＬＥＡＣＨ　ｔｈｅ　Ｆｒｅｅ　Ｗｏｒｌｄ

【Ｎコード】
Ｎ４０９７Ｗ

【作者名】
山人

【あらすじ】
剣善信（つるぎよしのぶ）は、不慮の事故で命を落とした。しかし、定番の神ミス、転生パターンで神は、好きな世界に生き返らせてやると言う。「じゃあ俺をブリーチの世界に生き返らせてくれ」と善信はいった。こうして、ブリーチの世界で善信の新たな人生が幕を開けたのだった。
（注意、この小説は、文才ゼロの自己満小説です。さらに不定期更新ですのでご理解いただけるようお願いします）
ただいま、尺魂界突入・救出編です。

プロローグ1

俺の名前は剣善信（つるぎよしのぶ）
隠れ戦国武将オタクで、刀剣の武器が好きで、いじめられっ子な
何処にでもいる普通の高校生だ。
俺は、いつものように帰宅していた。
はずだった。

「何処だここは？」

ふと目が覚めると、真っ白な空間に俺はいた。
周りを見渡したが人っ子一人どころか、何もない。
夢でも見てるのか？

「おーい、誰かいないか？」

大声で叫んでも返事はない。やっぱ夢だな。
目が覚めるまでどうするか、などと考えていると

「おいおい、夢落ちで済ますな」
「うわっ誰だお前！？」

急に背後から声がして振り向くと若い男がいた。おかしい、
誰もいなかったと思うが。

「オレか？オレは神様だ」

「マジで？」

「マジで」

「わかった、落ち着け俺、冷静になるんだ」

目を閉じて深呼吸をする。……よし。

「いろいろ言いたいことはあるが、まあいい。いくつか質問をしてもいいか？」

「ああ、構わないぞ」

えらそうだが、それは置いておく。

そして、一番聞きたかったことを聞く。

「何処だここは？」

一間おいてから

「ここは死後の世界、いわゆるあの世だ」

こいつの頭が、おかしいことは分かった。「今オレをバカにしただろ」とか

聞こえたが無視して次の質問を聞く。

「これは夢か？それとも現実か？」

「まあ中間ってとこだ。さっきも言ったように

ここは、死後の世界だからな。いろいろあやふやなんだよ。

まあお前がここにいる時点で、お前はすでに死んでるってことだがな」

こいつは、何を言っているのか？俺が死んだだって？そんなばかな。
しかし、そのことを聞いたとき、その考えに違和感を感じた。
そこで俺は思い出した。俺が死んだときのことを。

★★★

おれは、いつものように下校しようとしていた。
すると、俺を引き留める人物が現れた。
それは、俺の幼馴染でたった一人の友人
木下雄一だった。

「おいおい、待ってろって言ったろ」
「ああ…すまん」
「あんなの気にすんなって」
「分かってる」
「ならいいけどよ」

俺は、一応口下手だから
話しかけてくれても、あまり話せない。
それでも俺は、けっこう運動も勉強もできたから
妬まれて不良の奴らの標的にされた。
今日も俺はその嫌がらせにつき合わされた、というわけだ。
実際、そのせいで友人は離れていき、やがて一人になりかけた。
しかし、雄一はずっと俺の友人でいてくれた。
本当にありがたいものだ。

「やれやれ、早く帰ろうぜ」
「ああ、そうだな」

俺たちはいつもの道を通っていた。

俺が歩道側で、雄一が道路側だった。
いつもの他愛もない話をしているとそれはやってきた。
トラックが突っ込んできたのだ。

俺はすぐさまそれにきずいたが、雄一は気づいていなかった。
俺の位置は大丈夫だが、雄一は危ない！
そう思い、俺は雄一を無我夢中にこちら側へ引き寄せた。

その反動で俺が道路側に出てしまった。
その直後、俺は吹き飛ばされ、意識を失った。

プロローグ1（後書き）

初めまして山人です。初心者で分からないこともありますが精一杯がんばります。

※修正しました。

プロローグ2

「……」
「思い出したかな？お前は、友人をかばって死んだのだ」
そう、か……俺は死んだのか。
「そういえば、神様は、なんで俺みたいな一般市民のところに来たんだ？」
「ああ、それはだな。オレのミスでお前が死んだからだ」
「おいっそりゃどういうことだ」
「つまり、お前は死ぬはずではなかった。本当は、木下雄一が死ぬはずだった」
俺は沈黙した。俺の代わりに雄一が死ぬはずだった。
だが雄一を助けたことに、悔いはなかった。
「だから、特別にお前に、転生の許可をすることにした」
「それって好きな世界に生き返られるってことか？」
「ああ、そうだ。少しならチートも許す」
そうか。どうせなら楽しい世界に行きたいが……。
「じゃあ俺をブリーチの世界に生き返らせてくれ」
「ずいぶんあっさり決めたな。本当にいいのか？」
「ああ、一度行ってみたかったんだ」
「じゃあチートはどうする？」
「チートというより、斬魄刀の能力の指定をさせてくれ」
「それ位なら良いだろう」

小一時間ほど、たっただろうか。

「本当にこれでいいか？」
「ああ、世話になったな」
「当分戻ってくんなよ」
「わかってるさ。じゃあな」

そこで俺の意識は途絶えた。
転生後の世界は１８００年代だった。
そのあと、俺は意外にあっさり死んでしまった。
しかし、ブリーチ世界での完全な死は、魂魄の消滅だから
すぐには神の処に戻らない。
そして無事、流魂街に到着した。
「よし。死神になろう」
俺は京都とかに行くノリでそんなことを呟いた。
その後、俺は真央霊術院に入学した。
最初は、流魂街出身だとバカにされたが、すぐに実力で見返した。
俺の成長ぶりは、自分でいうのもなんだが
かなり優秀だと思う。
その後、六年ほどで俺は真央霊術院を卒業した。

プロローグ2（後書き）

次話から本編突入です。

プロローグ3

無事に死神になれた俺は、暇なので修業ばかりしていたら、１０番隊の隊長に抜擢された。
やっと修業の日々が終わると、最初は嬉しかったが、すぐに考えを変えることとなった。

「……しんどい」

今、俺の目の前には書類が山のようにある。修業の日々は確かに終わったが
今度は死ぬほどつまらない（もう死んでるけど）事務仕事だ。
ちなみに原作キャラには結構あった。平子さんや浦原さん、浮竹さんにも会った。
俺の知らない大きな事件も起こったりした。
現実逃避の回想を終えると、書類にはあまり手を付けず、布団に入って寝た。

隊長になって三十年ほどたったころ、原作に出た大きな事件が起こった。
そう、平子さんや浦原さんの逃亡事件だ。俺自体にもいろいろあったので
浦原さん達の力を借りて一緒に逃げた。
現世を神様が一戸建ての家を用意してくれたようで、そこに住むことにした。

それから、空座第一高校に行くため、準備を進めた。
そろそろ一護たちが入学するのだ。
俺は、転校生として行くことにした。
「どんどん原作に介入してやるぞ」
と意気込む俺であった。

プロローグ3（後書き）

すいません。
今度こそ次話から本編突入です。
※改稿しました。

転校生

「ちょっと緊張すんな～」

今、俺は一護たちの教室の前にいる。つまり、転校してきたのである。
なにせ学生なんてのは、２００年ぶりぐらいだからな。
緊張するだろ。
自己紹介に何を話そうかなどと考えていると、とうとう呼ばれた。
まあ、適当に話すかと考えるのをやめ、教室に入る。

まず、俺はすぐに教室のクラスメートを確認する。
一護、チャド、石田、井上、ついでに、たつき、水色、啓吾
俺が名前覚えてるやつらはこれくらいだな。
ちなみに、ルキアがいないのはまだ一護と接触していないからで
つまり、一護はまだ死神代行ではないということだ。
先生に自己紹介をしろといわれたので

「初めまして。剣善信といいます。趣味は刀剣の模型集めです。
よろしくお願いします」

と、簡単に済ませる。先生に座る場所を聞くと丁度
一護の隣だったので座ってざわめきが収まるまで待ってから
一護に話しかけてみた。

「となりよろしくな」
「ああ、えーと」

おいおい、もう名前忘れたのか。覚えられないのにもほどがあるだ

ろ。

「剣善信だ」
「ああそうか。わるい。名前覚えんの苦手なんだ」
「いいさ。べつに」
「俺は黒崎一護だ。よろしくな。」
「ああよろしく」

その日はその会話以外、特に何もなく終わった。

介入のきざし（前書き）

どうも、山人です。
今回はルキアの登場と織姫の兄の話です。
今回から視点方式を導入しました。
なるべく、投稿できるようにがんばりますので。
では、2話です。

介入のきざし

視点：剣　善信

その翌日、朽木ルキアが転校してきた。俺は思わずあきれた。あの口調はいつ聞いても
違和感がありすぎるだろ。
しかし、誰もそのことには触れず、普通に受け入れていた。
いやいや、誰か突っ込めよ。
その事とは別に、俺は正体がばれないか、ひやひやしながら霊圧を抑えていた。

そんな複雑な心境で過ごしていると、お昼頃、一護がやってきた。
一護も複雑そうな顔してるな、まあでも、ほっとくかな。夜にいろいろあるし。
今日は、たしか織姫のお兄さんの話だったからな。

そのあと結局俺は（誰にも）きずかれることもなく家に帰った。

「なんかさびしいな」

俺が部屋でぼーーっとしていると、外から爆音が聞こえた。
おっと、そろそろか　見に行くかな。
そして俺は、なるべく霊圧を抑えながら瞬歩で急いだ。

「やっと着いたか。久々に瞬歩使ったから疲れちまった」

「いってらっしゃい、お兄ちゃん」

あれ、終わっちまったか。う～ん、残念だな。あのシーンは感動するんだが。
もっと早く来るべきだったな。そうなると、することがないな。

「「よし、帰るか！」」

しまった！つい声出しちまった。しかも一護とハモったぞ。

「おい、そこにいるのは誰だ！」

あ～あ、ルキアに見つかっちまったよ。仕方ねえな。

「おっす一護」

俺はあくまで今通りかかった感じで声をかける。

「なんだ、剣じゃねえか。驚かすんじゃねえよ」

「一護知り合いなのか」

「はぁ、剣は、俺たちと同じクラスじゃねえか」

「そうか、それより貴様は何者だ」

「だから俺は、クラスメートの「そんな事は分かっている。私が聞きたいのは
貴様の正体だ。さっきから一護が見えている用だしな」しまったな」

一護が今死神になっていることを忘れてたな。嘘ついたせいか
めっちゃ視線が痛いんですけど。

「あ、そういえばそうだな」

と、今さら一護が気付く。まあ、俺もだけどな。

「それに貴様から、とてつもない霊圧を感じる。貴様は一体何者だ」

「よし！逃げよ！」

「あっ待て！」

俺は後ろから聞こえる声を無視して逃げた。
はずだったんだが、あっさり追いかけてきた一護につかまった。
まあ、敗因は俺が疲れて瞬歩使えなかったからだな。

「ルキア、捕まえたぞ」

「よくやった、一護」

一護も良いように使われてんじゃねえか。

「はぁ、分かった、正直に話そう。だが一護には外してもらう」

「なんでだ？俺も気にな「先に帰っておけ」くそっ、わかったよ」

そういって一護は帰って行った。まあ友達面した反面、すぐに話すのは
まずいよな。

それより今は、どうやってルキアを言いくるめるか、だ。

介入のきざし（後書き）

更新不定期ですいません。
処女作ですので、ご理解お願いします。

※改稿しました。

介入のきざし　パート2

視点：剣　善信

まあ、格好つけて言ったけど、本当のことに、嘘を混ぜて教えるだけだがな。

「さて話を始めよう。十三番隊所属の朽木ルキアさん」

「やはり知っていたか」

「俺のこともいいが、一つ聞きたいことがある」

「なんだ」

暇つぶしにちょっと遊んでやるか。

「なんで黒崎一護は死神になっていたんだ？」

「うっ…」

黙り込むなよ。ちょっと悪いことしたかな、とか思うだろ。

「……」

「冗談だ。俺はお前の味方だし、報告事態できない」

俺はつい本当のことを言ってしまった。

いや、だってルキアの奴、チャドみたいになってたし。

「それは、どういうことだ」
いつもの調子に戻ったな。ふぅよかった。
やっぱこんなことするもんじゃないな。性に合わん。
「まあ、死神をやっていた奴ってところだな」
我ながら他人事のように説明をする。
「やっていた、ということは、お前は今、死神ではないのだな」
「まあ、そういうことだ」
「ならお前はどこに所属していたのだ？」
これ、言って大丈夫か？まあでも、味方って言ってあるから大丈夫か。
たぶん口固い方だし。
「所属ってか、俺は元護廷十三隊十番隊隊長、だよ。」
「な、隊長！？嘘をつくんじゃない！」
「疑り深いな。本当だって」
「仮にそうだとして、なぜ隊長がこんなところにいるのだ」
「元って言っただろ」

「じゃあお前は隊長を辞めたのか？」
「いや、実際、逃げたようなもんだな」
「逃げただと？」
「正直、疲れたからな。結構、面倒だぞ。隊長なんてのは」
「そんな理由で逃げたのか！」
悪かったな、そんな理由で。まあ、本当は重要なのがもう一つあるんだがな。
「今の俺は元死神のただの一般市民だよ」
「まさか、こんなところに隊長クラスの死神がいるとは驚きだ」
「こんな所って言うけど、けっこういいもんだぜ。空座町は」
俺のもといた所に比べれば、みんないい人ばっかだからな。
「そうか、なら味方と思って一つ頼みたいことがある」
「頼みごとってのはなんだ」
「一護を鍛えてやってくれぬか。奴は力こそあるがまだまだ未熟なのだ。そこでお前の力を借りたい」
「そういうことは浦原さんに頼めよ」

「なぜだ。味方といったではないか」
おいおい、浦原さんのことスルーすんなよ。
「すまないな。今は、まだ力は貸せないんだ」
「あと、ついでに言っとくが、お前がもし、ほかの死神に見つかっても
俺は助けてやれないからな」
「それ相応の理由があるのだろうな？」
「それについては、ノーコメントだ」
「そうか…まあいい。ではまたな」
そう言ってルキアは帰ろうとする。
「おい、ちょっと待て」
「なんだ」
「俺の言ったことは、まだ誰にも決して言うなよ。頼んだぞ」
「なぜだ、と聞きたいところだがどうせ教えんのだろう。
まあいい、それに、もともと部外者には話すつもりはない」
「そうか、悪いな。ありがとよ」
まあ、良好な関係になったな。逆に言いくるめられた感があるけど。

そういえば、久々に瞬歩してわかったが、力がだいぶ衰えてるな。
そろそろ本腰入れて力を戻さねえと、今度、浦原さんの勉強部屋でも借りようかな。
まあ、そんなことは、明日にでも考えるかな。

介入のきざし　パート2（後書き）

※改稿しました。

インコと浦原商店

視点：朽木　ルキア

やつが隊長だとはな、霊圧こそ凄かったが、あまり信用しない方が良いだろう。

「ルキア、剣と何の話してたんだ」

「一護、奴は死神らしい」

「はあ？何言ってんだ。剣が死神？」

「ああ、それにどうやら奴は、私やお前では敵わないほど強い」

「それ本当なのか？」

「何度も同じことを言わせるでない！」

「分かったよ！分かったからそんなに大きな声だすな！下にまで聞こえるだろ！」

「ああそうか、すまなかったな」

「それは分かったが、どうしてあいつは虚退治をしないんだ？」

「奴が言うには死神を辞めたからしい、仕事に疲れて辞めたなどと言っていた」

これぐらいまでなら話してよかろう。

「そうか、もっといろいろ聞きたいんだが、続きは今度にしよう。もう眠くてたまんねぇ」

「そうだな…」

暗がりでよくわからなかったが、あの顔、誰かに…

視点：剣　善信

家に帰った俺は、義魂丸が少ないことに気づき浦原商店に向かった。

「どうも」

「あ！剣サンじゃないですか。お久しぶりっス」

「久しぶりと言っても、一か月しか、たってませんよ」

「昨日、丁度あっちから仕入れてきたとこっスよで、今日はなにをお求めで？」

「義魂丸を１０個ほどください」

「珍しいっすね。そんなに買い込むなんて」

「ちょっとこれから忙しくなるんですよ」

「そうっスか、代金は、３８００円になりますよ」

「はい、これで」

「どうも。それにしても、無職なのにどっから、お金が湧いて出るんです？」

「企業秘密ですよ」

本当は毎月、１０万円、神様がくれるんだけどな。
けっこう、やりくりが大変なんだよ。

「はい、これが義魂丸ッスよ」

「どうも、じゃ、また今度」

「まいどあり～」

家に帰った後、特にすることもなく、俺は眠りについた。

視点：剣　善信

その翌日……

俺は、特にすることもなかったので
インコ事件には参加するか。俺も久々に戦いに参加したいからな。
などと考えていた。

しかし、今俺はインコ事件が起きている場所に向かって急いでいる。
なぜ、そんなに急いでいるかというと、寝過ごしたからです。
あと五分、あと五分、と思っていたら、いつのまにか
五時間も寝過ごしました。

「よし、見つけた！」

もう、結構終盤だな。一護も来てないし、参加するか。
そう考えた俺は、義魂丸を飲み、義骸に隠れてるように言い、あいつらの前に飛び出す。

「よう朽木、手を貸そうか？」

「剣！」

『死神がもう一人出てきやがった！こりゃあラッキーだぜ！』
俺が出た途端に、虚が気持ち悪い笑みを浮かべやがった。
確かこいつ、シュリーカーとかいう奴だったか？

「一瞬で終わらせる。覚悟しろ」

『てめえみたいな死神に何ができる！』

虚のそのセリフが言い終わらないうちに、俺は、斬魄刀で斬った。

『ギャアアアアー』
刀を鞘に戻す。すでに虚は真っ二つになっている。
こんなザコ、白打だけでも倒せんだけどな。
「馬鹿な、あの虚を一瞬で倒すとは…」
おいおい、俺、一応隊長だったんだけど。
そこまで甘く見られてたとは。
「ルキア、大丈夫か！？」
一護が今頃やってきた。まあ初心者にしては速い方だけどな。
「あれ、全部終わってるじゃねえか」
あ、そういえば俺が死神だって言ってねえよな。
どうすっかな。
「あれ、剣じゃねえか。お前、本当に死神だったんだな」
あれ、なんで知ってんだ？さてはルキアが漏らしたな。
まあ、良いか。隊長ってのは、ばれてないみたいだし。
「ああ、まあな。悪いな。黙ってて」
「それはいいけどよ。これはお前がやったのか？」
「まあ、そんなところだ」

「お前たち、そんなことより、あれが来るぞ」

「ああ、そうだったな」

すると、俺たちの前に気色悪い骸骨付きの門
そう、地獄の門が現れた。

「なんだよこれ！？」

「多分朽木が説明しただろうが、斬魄刀で洗い流せるのは虚になった後の罪だけだ。
だが、生前大きな罪を犯した者は地獄の連中に引き渡すことになってる」

「門が開くぞ」

ルキアがそう言うと門が開き、地獄の門から大きな刃が出てきて虚を突き刺し、刃にさしたまま
中へと引きずり込んだ。

〈ハーハハハハ！！！！！〉

門の向こう側からこの世の物とは思えない半狂乱の笑い声が聞こえた。
まあ、この世じゃないだろうが。

「堕ちたのか。地獄へ」

一護がそうつぶやいた。まあ、気持ちは分かるな。

複雑な心境になるな。いろいろと。

「さてと、インコを魂葬するぞ」

「因果の鎖は切れてるのか」

「ああ、そのようだな」

「じゃあ、魂葬するぞ」

シバタは不安そうな顔をしていた。それにきずいたルキアが尺魂界の良さを説明した。

そこでやっとチャドが口を開いた。

「シバタ、もし俺が死んだら、もう一回お前を抱えて走り回っていいか？」

「うん！」

「さあ、準備はいいか？」

しばらくした後、ルキアに話を吹っ掛ける。

（おい朽木、お前俺が死神って言っただろ）

（言ってはまずかったか？）

（死神ってのはいいが、隊長ってのは言うなよ）

（なぜだ？）

（あまり他言して護廷に気付かれると厄介だからな）

（なるほど、そういうことか）

（ところで、剣、一つ聞いてよいか）

（なんだ？）

言葉に詰まったように、一瞬黙り込む。
そして、少し辛そうに話し始める。

（……お前の親族に志「おい、お前らなにやってんだ？」…また、こんどでいい）

「あ…ああ」

「一護、なんでもない。それより帰るぞ」

「ああ、じゃあな。剣」

「ああ、またな」

なんだったんだ？少し気になるな。
でもこればっかりは、仕方ないな。さてと、家に帰って寝るか。

視点：朽木ルキア

やはり、似ている。だがなぜあそこまで似ているのだ。
昼間、初めて見たときは一瞬だが、あの方に見えてしまった。
もし、剣が志波家の人間なら申し訳がつかない。
私はどうしたらいいのだ？

「おい、ルキアどうしたんだ？」

「いや、なんでもない。それより一護、明日のためにサッサと寝るぞ！」

「ああ、そうだな…？」

一護は気になるような表情をしたが何も言わなかった。
きっと、聞かれたくないのだと、気をまわしてくれたのだろう。
さてと、私も寝よう。たぶん考えても仕方のないことなんだろうからな。

インコと浦原商店（後書き）

どうも、山人です。
お楽しみ頂いてるでしょうか？
ちなみに
『』が虚のセリフで、（）が小声です。

感想、評価、誤字報告、ミス報告等をお待ちしています。

※かなり変えてみました。

とある一日

視点：剣　善信

今日は、一護がお墓参りに行く日なんだが、
俺は、同行しない。
あれは、あまり関わらない方が、良さそうだからな。

「はぁ、暇だなぁ」

暇だし、俺が神様にもらった力でも教えようか。

俺がもらった力は「原作記憶能力」と、「斬魄刀の能力設定」だ。

まず前者は、言葉の通り、原作の情報をある程度忘れない力で
さらに、俺が元居た世界で話が進めば、俺の記憶も追加される仕組みだ。
まあ、忘れちまったら、俺だけの特権がなくなるからな。

あと後者は、あくまでも、能力の大まかな設定だけで、斬魄刀の名前や
技は、自分で聞きだし、自分で開発したものになる。
まあ俺は「できるだけ不思議で凄い能力にしてくれ」としか言ってないし。

とまあ、最低限のことしか、頼んでないんだよな。
もっと頼んでおくべきだったか？
まあ、これだけでも十分役に立ってるけどな。

「あ～、暇だ」

くそ、暇すぎる。やっぱ介入しようかな。
いや、だめだ。俺はそんなコロコロ変わる人間じゃない！

「ま、まあ見るだけならいいよね？」

俺は今、一護とグランドフィッシャーの戦いを観戦している。
観戦なので、観ているだけだと、むずがゆさを感じる。

あ、帰ってくぞ。やっぱ一護の成長の早さには、驚かされるな。
まあ、結局何もしなかったな、俺。
さてと、することもないし、家に帰って寝るか。

とある一日（後書き）

どうも、山人です。
善信の神様にもらった力が判明しました。
斬魄刀の能力は救出編で判明する予定です。

※修正しました。
感想、評価、誤字報告、ミス報告等をお待ちしています。

虚撃退&修行

視点：剣　善信

虚総数：推定２５０体以上

「石田のくそ野郎がぁー！！」

俺は、石田のせいで虚の大群に囲まれてます。
そして今、そいつらを倒しまくっている最中というわけです。

「破道の六十三　雷吼炮！」

今ので、５体は倒したな。
鬼道はそんなに出来る方じゃないんだが。

倒した数：推定２０体

正直、義骸に入った状態でこれだけの数を鬼道で相手するのはしんどすぎる！
そう思った俺は、義魂丸を飲み、出撃する。

「これでも喰らえ！」

俺は、斬魄刀を振り回してなぎ倒す。

倒した数：推定９０体

「はぁはぁ、ちくしょう！さすがに数が多すぎなんだよ！」

体力が修行不足で落ちまくっている今の俺では、正直、この数はきつい。
やっぱ日ごろの行いがこういうところにでるな。

倒した数：推定１２０体

「はぁはぁ、くそっ、もう少し耐えるしかないな」

もうすこしで、一護が、出現した大虚を追い返すのに便乗してこいつらも消えるからな。

倒した数：推定１５０体

「はぁはぁ、ちくしょう！俺も始解ができたら！」

俺は、とある事情で斬魄刀の能力を使えない。
まあ、絶対ではないんだが。

倒した数：推定１６０体

「はぁはぁ、しんどい」

まじで、疲れてきたな。もうそろそろだと思うんだがな。
おっ、帰ってくぞ。ふぅ、助かった。

「さてと、こりゃマジで修行したほうが良さそうだな」

どうせ尺魂界に、行かないといけないしな。
浦原さんの勉強部屋を借りて修行だ！

俺はそう考え、勉強部屋にこもることになり、数日がたった。

「はぁはぁ、よし、だいぶ感覚が戻ってきた」

「今日は、これくらいにしときましょう。これからここも使いますんで」

あれから、数日間、浦原さんに組み手をしてもらってだいぶ力が戻ってきた。

そういえば、そろそろルキアが連れ去られるころだな。一護のこともあるし、ちょっと見に行くか。

「浦原さん、ちょっと見「剣サンは、寝ててください。後でやってもらいたい事があるんで」はぁ…わかりました」

まあ、疲れてるし丁度よかったかな。

さてと、布団を借りに行くか。

そのあと、俺は布団に入りすぐに眠りについた。

虚撃退&修行（後書き）

どうも、山人です。
ちなみに連続投稿です。

感想、評価、誤字報告、ミス報告等をお待ちしています。

一護の修行１

視点：剣　善信

目が覚めた俺は、顔を洗いに洗面所に行ったあと、勉強部屋に向かった。

「やっぱり誰もいなかったな」

俺は、洗面所に行くついでにほかの部屋も見たが、誰もいなかった。おそらく、一護の修行を手伝ってるんだろう。

到着した俺はあたりを見回すと、地面に空いた大きな穴を浦原さん達が覗いていた。
死神化の修行中なんだろう。

「あ、剣サン。こっちです、こっち」

「今、行きます」

俺に気付いた浦原さんが、穴の方に呼び寄せてきた。
俺も行くつもりだったから、別にかまわないけど。

「うあああああ！！！！！！！」

一護の虚化が始まったようだな。まあ、無事死神化するから心配ないけど。

「おおおおお！！！！！！！」

それにしてもすごい声だな、まるで虚だ。
まあ、実際そうなりそうなんだが。

「縛道の九十九第二番！卍禁！！」

鉄裁さんが卍禁を唱えたってことは、そろそろ終わりだな。

「終局！卍禁大封！！！」

そろそろ体を伏せた方がいいか。一護が出てくる。
そう思い、俺が体を伏せた途端、穴から光が放出された。

後はお察しの通り、一護が出てきてレッスン2クリアって事で省略します。

「たぶんこれから、浦原さんと一護の戦いが始「じゃあ剣サンと戦ってください。
あたしとは、黒崎サンが剣サンに勝ってからにしましょう」っておい！」

（剣サン、断るとかはなしっスよ。散々修行につきあってあげたじゃないっスか。
恩返しだと思って協力してください）

（それはいいですけど、俺が倒した虚も受け取って金に換えてくださいよ？）

なぜか浦原さんは、俺の倒した虚を換金してくれない。
だから、俺は神様にもらう月給で過ごす羽目になっているのだ。

（前も言いましたがそれは無理な話っスよ。文句言わずに協力してください）

（そうですか、わかりましたよ。協力しますよ）

（そう怒らないでください。次店に寄ったときは半額でいいっスから）

（本当ですか？まあ、それはいいとして、どこまでやっていいんですか？）

（始解はしてください。つらいのは分かりますが
能力は使わなくてもいいので。それ以外は殺さない程度で本気を出していいっスよ）

（そうですか、わかりました）

「おい、二人とも何話してんだ？」

「いやなんでもない。それよりさっさと準備済ませろ」

「準備なんてとっくに終わってる。それよりさっさとやろうぜ。俺は早くあの下駄帽子と勝負がしたいんだ！」

「はぁ、わかったよ。お前からかかって来い」

「望むところだ！」

一護の修行１（後書き）

どうも、山人です。
次話には、善信の斬魄刀の名が判明します。
能力の発動はまだ先なのでどうぞあしからず。

では、感想、評価、誤字報告、ミス報告等お願いします。

一護の修行２

視点：剣　善信

さてと、とりあえず一護が斬魄刀の名を聞くまでは、威圧程度でいいかな。

「二の技、光月！」

「うわっなんだ！？」

何を驚いてやがる。ただ霊圧を斬撃強化に使っただけじゃねえか。確かに、これ使うの斬月の月牙天衝しかないけどな。それに、俺のは月牙天衝をぱくったような物だし。俺のは霊力の消費を抑えている分、月牙天衝には到底及ばんが、威圧には十分だ。

「おいおい、逃げ回るだけじゃ俺には勝てねえぞ！」

「望むところだ！ちくしょうが！」

「ほらよっと」

「ぐあっ！」

俺が斬魄刀の柄で一護の鳩尾を殴った。そのとき、一護の奴、自分の折れた斬魄刀を落としやがった。

折れてるからってちゃんと大事に持ってろよ。ったく、しょうがねえな。

俺はそう思いながらそれを拾った。

「おい！それ返せよ！」

「はいはい分かったよ」

俺はそう言い、刃と柄を分かれるように叩き割り、一護に柄だけ返した。

「お前！！」

「なんだ、柄だけじゃ戦えないのか？」

「このちくしょうが！！」

そうは言うが足は逃げ腰じゃねえか。全く、良いのは威勢だけだな。

「一護、威勢だけある奴なんてのは山ほどいる。このまま終われば、お前はその程度だったことだ」

「くそっ、じゃあどうすりゃいいんだ！」

「そんなことも分かんねぇなら、やっぱその程度ってことなんだよ！」

そう言った俺は、一護の動きが止まったことを確認して攻撃の手を休める。

そろそろ来るはずだからな、あれが。

「斬月！！！」

そう叫んだ一護は、鞘から柄だけだったはずの刀を引き出した。
その瞬間、一護の周りを青白い霊圧が渦巻き、
さらに、その勢いのまま巨大化した斬撃を俺の方に飛ばしてきた。

「よっと」

普通に避けた俺は、死覇装に少し掠ってしまった。
一方、俺に避けられた斬撃は岩にぶち当たり、岩を崩壊させた。

「やっと来たな、これを待ってたんだ」

確かこの後、もう一度斬撃を飛ばしてくるはずだ。

「剣、頼むからちゃんと避けてくれよ」

「来るか。真実へ誘え！正宗！！！」

「手加減できそうにねぇ！！！」

俺は何年振りかの解号を唱え、始解と共に斬月の放った衝撃波を相殺した。

煙が晴れ、俺の斬魄刀は、柄に龍の模様が現れ、身の丈ほど刀身が伸び

さらに、刀身が光り輝く長刀になった。
そう、これが俺の斬魄刀、正宗だ。
この名前の由来は、俺の好きな物が戦国武将と刀剣だったことに由来し
両方の名を持つことからだと思う。
「あれをそのまま喰らったら、片腕一本くらい持ってかれてたかもな」
「……」
「一護も寝ちまったようだし、これくらいにしときますか」
「そうっスね、剣サンも休んでください。剣サンは明日から、本格的に力を戻してもらいますからね」
「そうですか、今でも十分戻ってきたと思ってるんですがね」
それにしても、とうとう尺魂界に乗り込むときが近づいてきたようだな。
まあ、気楽にやるとするか。

一護の修行２（後書き）

どうも、山人です。
今回登場した、二の技、光月は善信の技で、一から十まで作る予定です。

さて、善信の斬魄刀の名が判明しました。正宗と言います。
少し安直かなと思いましたが、この小説を作る前から決めていたことなので
ご期待に添えない場合はすいません。

では、感想、評価、誤字報告、ミス報告等をお願いします。

解号を変えました。すいません。

断界と尺魂界（前書き）

どうも、山人です。
まず、初めに…投稿が遅くなってすいません。
諸事情により遅れてしまいました。
もうすこし、更新ペースを上げるのでお許しください。

断界と尺魂界

視点：剣　善信

俺はあの後、浦原さんと数日間に及ぶ激闘を繰り広げた。
でも実際、俺は始解をしてないのに、浦原さんは普通に紅姫で攻撃してくるから
いつ死んでもおかしくない緊張感の中で戦う羽目になった。

尺魂界出発の日、当日…

「ふぅ、まったく」

一護との修行の数日後、とうとう尺魂界に出発する日が来た。
義骸を脱ぎに一旦家に帰った俺は再び浦原商店に向かおうとしていた。
はずっだったんだが…

5分前…

「さてと、そろそろ行くか」

俺は準備を終え、もうすでに浦原商店に向かおうとしていたため
窓への注意がおろそかになっていた。
実際、ちょっと家に戻っただけで、すぐに戻ると浦原さんに言って
おいたはずなんだが
それは飛んできた。

「うわっ！？」

それとは浦原さんの集合メッセージだった。ダイニングメッセージ風の。
しかしそれは、普通、壁に当たってメッセージが表示されるはずだが、それは俺にぶち当たった。
それでは、メッセージを読み取ることもできなくなり、俺は、血だらけみたいになった。
そのあと、俺はあわててシャワーを浴び、服を洗濯機に入れた。
そして現在に至るというわけだ。

「ふぅ、まったく」

浦原さんもちゃんと狙いをしっかりしてほしいよ。…ワザとじゃないよな。

「おっと、それより今は、急がねぇとな」

俺は義魂丸を飲み、義骸にある程度言い聞かせ、出発した。
浦原商店まではそこまで遠くないが瞬歩を使う。

「よし、到着っと」

それにしても、だいぶ速くなったな。修行した甲斐があったってもんだよ。

「どうもッス。剣サン」

「浦原さん、何してくれてるんですか。おかげで服、血だらけですよ」

「そりゃどうもすいません。鉄裁サンに間違えて頼んでしまって」
にやけ笑いでそう言った浦原さんは商店の中に戻った。
おいおい、そんな顔したら疑われる事分かってやってるよな。
「あ、そうそう、みなさんもう中で待ってるッスよ」
浦原さんは商店から顔だけ出してそんなことを言う。
時間がかかったのは浦原さんのせいですよ。
そんなことを思いながら、急いで勉強部屋に向かう。
「あれ？剣じゃねぇか。お前も行くのか？」
「当たり前だろ。何のために俺まで修行したと思ってんだ」
一護が俺に話しかけたことで、石田やチャド、織姫が俺の方に顔を向けた。
ああ、そういえばこの三人とは顔を一度も合わせてないな。
チャドは、あの時見えてなかっただろうし。
「おい、お前はだれだ？」
石田、お前無愛想すぎるだろ。誰がお前の出した虚を倒したと思ってんだ。
「え～と、俺は剣善信だ。昔、死神をやっていた人間だが、今は高校生をやっている一般市民だ」
「おい黒崎、本当にこんなやつが役に立つのか」

「ああそうか、お前らは知らないんだったな。剣と戦った事あるんだが
こいつ、予想以上に強いから心配すんな」
おいおい、ルキアにも言われたがよ、俺ってそんなに弱そうか？
「善信、久しぶりじゃな」
「あ、夜一さん。お久しぶりです」
夜一さんは相変わらずだな。これなら心配ねぇな。
穿界門と断界の説明は省略…
「制限時間は四分です。開いた瞬間に駆け込んでください」
「おう！」
「いきます！」
その合図とともに俺たちは門に飛び込んだ。

俺たちは今、断界を激走している。
正直、みんな遅い。力が戻ったせいかもしんないけど、そう感じる。
「やっぱり気味が悪いな。ここは」

そこで拘流に石田のマントが喰われた。それをチャドが引きちぎって抱え込む。
ナ～イス、チャド。
「みんな、後ろから何か来てるぞ！」
そう石田が言うと、後ろから列車が走るような音が聞こえ始めた。
「何だ！？こいつは！？」
「拘突じゃ！　七日に一度しか現れぬ掃除屋が、なにも今出ずともよいものを！」
「くそっしょうがねぇ。みんな、俺の腕に掴まれ！」
俺はそう言い、腕をできるだけ広げる。
織姫の盾舜六花で吹っ飛ばされるのは御免だからな。
「善信、どうする気じゃ」
「しっかり掴まっててくださいよ！」
全員が捕まったことを確認して足に力を込める。
「一の技　月歩！」
それを発動した瞬間、急に周りが明るくなった。
そう、断界から出たのだ。俺は瞬歩を使いながらゆっくり降りる。
「みんな、一人も欠けてないか？」

「まさかこんなに早く変えのマントを使う羽目になるとは」
ま…まあ、全員無事のようだな。
「善信よ。しかたなかったのは確かじゃが…
だからと言ってあれは余計に皆を危険に晒す行為じゃったぞ！」
「す…すいません」
「いいじゃねえかそんな怒んなくても。
結果的には剣のお陰で全員無傷だったんだしよ」
「おぬし、事の重大さが分かっておらぬようじゃな」
一護が俺を庇うとは…良いやつだな。本当に。
「こ…ここが”尺魂界（ソウル・ソサエティ）”か」
ここに来たのは何年振りだ？全く懐かしいな。
よし！俺も少しは暴れてみるか！

断界と尺魂界（後書き）

今、バウント編を入れようか迷っています。
入れてほしい方は、感想に一言でもいいので書いてください。
感想、評価、誤字報告、ミス報告等をお待ちしています。

瀞霊門

視点：剣　善信

「こ…ここが”尺魂界”か」

一段落してあたりを見回した一護がそう言った。
まあ、町並みが現世とかなり違うから最初はびっくりするかもな。

「そうだ。ここは俗に流魂街呼ばれる場所でな。
尺魂界に導かれてきた魂が最初に住まうところで死神の住む瀞霊廷の外延に位置している。
尺魂界の中で”最も貧しく、最も自由で、最も多くの魂魄が住むところ”だ」

そういえば、流魂街出身の死神って大抵生きてる頃の記憶をなくしてるけど
なんでだろうな？俺は能力のおかげで、残るようになってるからそんなことは無いけど。

「何だ？あっちの方は街並みが全然違うじゃねぇか」

「ああ、あれは「分かった！あっちが死神の住むなんとかって町だな」！？」

「おっしゃー」

あのバカ！少しは人の話を聞け！

「おい！まだ話が終わってないし、そっちに行くと危ないぞ！」

「え？」

一護がこっちに振り返った瞬間、上空から瀞霊門と呼ばれる巨大な門が現れ
それと同時に西の瀞霊門の門番、？丹坊も現れた。

「久しぶりだ。通行証なしでこの門を通ろうとしたやづは。
久々のオラの客だ。持て成すぞ、小僧」

「で…でかい。なんだあいつ。人間の大きさじゃない。何者なんだ？」

「奴の名は？丹坊（じだんぼう）。尺魂界全土から選び抜かれた豪傑の一人で
四大瀞霊門の一つ、白道門の門番じゃ」

夜一さんが石田に丁寧に説明している。
けど、そんなにのんびりしてていい場合じゃなさそうだな。
このまま一護が？丹坊を倒して門を開けさせると、市丸ギンと遭遇しちまう。
そうなると、いろいろ厄介だし。

「じゃあ、こいつを倒さなければ、中には入れないってことですね」

「ああ、じゃがそう容易なことでもないぞ。なにしろ、奴がこの任について３００年
一度もこの白道門は破られたことは「おい？丹坊、俺だよ。俺。悪いけどここ通してもらってもいいか？」何をしているのじゃ！？善信！？」

「ん？剣さんじゃないべか！どうしてあんたがこんなところにいるだ！？」

おお！意外な反応だ。ダメ押しでやったんだが
覚えててくれてるとは思わなかったよ。

「いろいろあってな。それより中に入れてくれ。急ぎの用事があるんだ」

「それは無理な話だべ。あんたは罪人だ。見逃すだけで勘弁しでぐれ」

やっぱそう来るか。
まあ、こっちには魔法の言葉があるけどな。

「なあ？丹坊、俺たちの”仲”じゃないか。それに本当に急ぎの用事があるんだ。頼む！」

「それを言われると辛いべ…分かっただ。今回だけ特別だど！」

本当はこんなことしたくないが、お前の負傷を抑えることも兼ねての行動だから
うらまんでくれよ。

「おい善信、どういうことじゃ？なぜ？丹坊が門を開けることを了承したのじゃ？」

「昔、ちょっとありましてね。あいつとは」

「おい剣、お前が何もしなくても俺なら戦(や)れたぞ」
「こっちにもいろいろあんだよ」
まあ、どっちにしろ門が開くなら、なるべく早いタイミングで開けてもらった方がやりやすいし。
「じゃあ開けるど！ぬおおお！！！！！！」
《キィィン！！！！！》
門が開いた瞬間、かすかに見えた市丸ギンに瞬歩で斬りかかった。が、ギンは驚いた表情こそ見せたが、俺の斬魄刀を脇差(しんそう)で受け止めやがった。
「こりゃ、驚いたわ～。誰かと思たら、１０番隊の元隊長さんやないですか」
「ちっ、失敗か。昔の仕返しをしてやりたかったんだが」
俺は嫌味たっぷりにそう言ってやる。
ギンの奴は浦原さんとはまた別の嫌なにやけ笑いを浮かべた。
「それは少しお門違いとちゃいます？僕自体は何もしてあらへんし」
「そうかい。奇襲は失敗したんだ。俺は逃げさせてもらうぞ」
「あかんなぁ。アンタみたいな罪人をここで見逃すほど僕は優しゅ

うないで」

「ほう、罪人とはよく言ったな。俺と鬼ごっこでもして勝つ自信があるのか」

俺は腹が煮えくり返る気持ちでいっぱいだったが、あえて押さえながら言った。

「まあそんな怒らんといてや。僕もアンタと鬼ごっこすんのは、勘弁やし
見なかったことにしといてあげよか？」

「勝手にしろ。俺は逃げる」

俺は瞬歩を使い、？丹坊にタックルをかまして一緒に門の外に出た。
その直後、門は低い音を出しながら閉じた。

「おい剣、なんで戻ってきちまったんだよ？
それにこいつも一緒に押し出すなんて何してやがんだ」

しかたねえだろ。奇襲に失敗しちまったんだから。

？丹坊は、俺に押された衝撃で頭でも打ったのか、大の字に伸びていた。

「おい剣、聞いてんの「一護下がっておれ。善信に話がある」ちぇ、分かったよ。」

（何ですか、夜一さん）

（とぼけるな、善信。おぬしが市丸ギンと一戦交えたことは分かっておる）

あれ、おかしいな。あの位置だと見えないと思ったんだが。

（だったら何だと言うんですか）

（門はおそらく警備されて使えないであろう。これからどうするかじゃ）

（どうするも何も志波空鶴のところに行けばいいでしょう…）

（おぬしは、あれほど行きたくないと言っておったであろうが）

（この際、仕方がないでしょう…）

俺はとある理由であそこには行きたくなかったんだが
こればっかりは仕方ない。

（それもそうじゃな。ではすぐに出発するとするかの）

（はい…）

「いつまで話してんだよ。それに何話してんだよ」

「いやなんでもない。それより行くとこがあるから出発するぞ」

それにしても、空鶴のところに行くのはいつぐらいぶりだったか？
あまり行きたくないが、しっかりけじめをつけねぇとな。

突然の警告

視点：剣　善信

「じゃあ、？丹坊を起こしてさっさと出発するぞ」

「ああ、そうじゃな」

そう考えをまとめたところ俺は突然、閃光に包まれた。

「何処だ。ここは？」

俺はついさっきまで尺魂界にいたはずだが、突然、閃光に包まれてここに飛ばされた。

この、何処かで見たような真っ白い空間といえば…

「オッス、久しぶりだな」

「！？」

突然声をかけてきて、誰かと思えば、俺を転生させたあの時の神様だった。

「おい、こりゃどういうことだ？説明しろ」

「まあ、そんな急かすなって」

「急かすもなにも、何で俺がまたここに来たんだ？
俺はまだ死んでないぞ」

「呼んだ理由も説明するからとりあえず落ち着け。そんな焦るな」

別に焦ってなんかいないが、ちょっと驚いただけだよ。
呼ばれるようなことはしてないし。

「まず、呼んだ理由はお前に用があったからだ」

「当たり前だろ。用もないのに呼ばれちゃ困る」

これは俺の本音だ。よっぽど暇な時ならいいが
忙しいときに呼ばれちゃ困る。

「まあ、呼んだ理由を簡単に説明すると
別の転生者がお前のブリーチの世界にいるかも、ということだ」

「どういうことだ。なんで別の転生者がいるんだよ？」

「最初っから話すと長くなるけどいいか？」

「ああ」

「えっとな、まずオレ達が今いる世界を神界（しんかい）と言うんだが
これは、神一人につき一つもらえて…」

「ちょっと待て」

「なんだよ？」

「もしかして、神様ってお前以外にたくさんいるの？」

「あれ、言ってなかったっけ」

「ああ、それにまだアンタの存在がなんなのかよくわかっていない」

「そうか。それじゃあ説明するけど、神様ってのは元々、人の思想が作り出した存在でいてほしいっていう気持ちから生まれたんだ」

「それじゃあ、あんたみたいな神様はただの空想上の存在なのか？」

「いや、違う。かつてはそうだったが、今では実質的な力を持っている。だから今では、人の思想がなくとも存在できるようになっている」

まあ、そりゃそうだよな。力がなきゃ俺を転生させることなんて出来ないし。

「その実質的な力を持った神は世界を管理し始めた。その神が管理を楽にするため、作り出したのがオレみたいな分身の神たちだ」

「分身？」

「ああ、そうだ。俺の知り合いだけでもざっと十兆人はいるな。

それぐらい分身はたくさんいるわけだ。
それで、分身の神たちはそれぞれ自分の思考を持ち、自分の担当する世界の区域を管理し始めた」

「担当する世界ってどういうことだ？」

「人が想像したもしもの世界のことだ。つまり、もしもの世界の数だけ神がいることになる。
そこでさっきの話に戻る」

「さっきの神界のことだな」

「ああ、それで神界は神一人に一つもらえる生活空間で
大体の神たちは神界で生活を送る。
まあ、神界なら神は最大限で力を発揮出来るからな。
それで、神はここでいろんなことができるわけだが
実際、世界を創造することもできる。
お前の転生はその力を使って新しい世界を創造したというわけだ。
でも、実際管理する世界が増えるから誰もやらないが」

「へぇ、そういえばこの空間はどこまで続いてんだ？」

「さあな。大抵の神は自分から出ようともあまり思わないし
出る機会もそんなにない。まあ、たぶん何処までも続いていると思うぞ」

「へぇ、そうなのか」

「それで、神の中には変な奴もいてな、危険分子として処分される
奴もいるわけだ。

そういう奴は大抵、自分がすべての世界を収めるだなんだ、とか言ってる奴ばっかで
処分された神は大抵、処刑される」

「で、本題は？」

「それなんだが、さっきも言ったように危険分子として処分された場合
処刑されるはずの神が今回、運よく逃げ延びてオレが管理してる区域に侵入したという
情報が入ったというわけだ」

「つまり、俺がいるブリーチの世界に別の転生者として侵入した可能性があるというわけだな」

「ああ、そういうことだ」

「で、俺にどうしろと言うんだ？」

「まあ、お前が見つけるかわからんが、見つけたら倒してくれ。
逃げた神は、弱っていてある程度の力しか使えんだろうし」

「無理だろ。弱っていても相手は神だぞ」

「倒すしかないんだよ。じゃないとオレの管理している世界ごと消される可能性がある。
そうなったらオレもお前もお陀仏だよ」

「マジか…」

「あ、そういえば逃げた神は、神の力でお前のブリーチの世界の奴に取り憑いてるかもな。誰に憑いてるかまでは分からんが」

「俺に全部丸投げする気だろ…」

「まあ、そう言うなって。新たに分かったことがあったら教えるからさ」

こいつ一応神のくせに、いい加減だし、フランクすぎるだろ。もっとサポートしろよ。

「じゃ、頼んだぞ」

「って、おい！」

神がいい加減なことを言った瞬間、閃光が俺を再び包んだ。

「……」

「おい剣、聞いてんのか」

「んっなんだ？」

「なんでお前、ボーッとしてんだよ？どっかに向かうんじゃなかったのか？」

「ああ、そうだったな」

誰かと思ったら一護じゃねえか。
どうやら元の場所に戻ってきたみたいだな。
まあ、神の言ったことも気になるし、頭には留めておくか。

突然の警告（後書き）

どうも山人です。
ためておいた分を投稿します。

感想、評価、誤字報告、ミス報告等をお待ちしています。

※修正しました。

志波家（前書き）

どうも山人です。
久々の投稿になります。
すいません。ただ今スランプになってしまっている状況です。
なるべく頑張りたいと思いますが、投稿が遅くなってしまうこともしばしばです。
どうか、温かく見守っていただけると幸いです。

志波家

視点：剣　善信

俺たちは今、村長さんの家にいる。
その経緯はと言うと、？丹坊が全然意識を回復しなくて困っていたところ
村長さんが家から出てきて、なんでも俺が戦った市丸との交戦を何人かが見ていて
どうも？丹坊をかばっているように見えたらしく泊めてもらえることになったわけだ。

「おい剣、どこに行くんだよ？」

「ん？ああ、もう寝るんだよ。明日は朝早いからな」

昨日から寝てないから、もう眠いんだよ。
それに万全の状態で行った方が良いからな。あそこは。

「お前は夜一さんの話を聞かなくていいのか？」

「何言ってんだ。その話の内容を決めたのは俺と夜一さんだぞ」

まあ決めたといってもほとんど原作通りだけどな。
下手にいろいろ言うと良くないだろうし。

「そうか。じゃあ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

俺は一護に適当に言葉を返し、居間の隣の部屋に敷いてあった布団でさっさと寝た。
原作通りだとすると、岩鷲とその子分たちがやってくるだろうし。
今、あいつらとかかわると、後で面倒くさそうだからな。

その十分後ぐらいに扉を突き破るような音がしたが、俺は気にしないでそのまま寝た。

…その翌日

「ああ～、よく寝た」

もう本当によく寝たよ。こんなによく眠れたのは久しぶりだよ。
まあ、これから眠れなくなる日が多くなりそうだけどな。

「おお、起きたようじゃな。さっさと支度ををするのじゃ。お前が一番最後じゃぞ」

「え？そうなんですか」

まさか、一護よりも遅れて目を覚ますとは俺も不覚だったな。
気を付けねえと。

「ああ、一護の奴も起きてはおるのじゃが、昨日の岩鷲という若造と再戦したいと言っておるのじゃ」

そういうことか。まあ、俺には関係ないけど。

「そうですか。じゃあ俺は先に行って待ってますから」
俺は夜一さんにそう言い残し、さっさと村長さんの家を出た。
「おはよう、剣くん」
「おはよう」
「ああ、おはよう。井上、チャド」
家の前で待っていた二人に他愛もないあいさつを交わしたところでほどなく一護も集合し出発した。

「おお見えたぞ。あれじゃよ」
そう言い、夜一さんが顔を向けた方には、これでもかというほど特徴的な家があり
その家の特徴となっている家のわきから伸びた巨大な二本の腕が持つ旗にはでかでかと
”志波空鶴”
そう書いてあった。
「「こっ、これは…」」
「わぁー!!かっこいい〜!!」

「っんぐ！？」

と、俺の仲間たちはそれぞれその家の感想を述べている。
まあ、誰でも驚くよな。こんな家。

「「……！？」」

一護と石田よ。そんなことで驚いてどうする。驚かされるのはこれからだぞ。
それにしても、朝早く出発した割には、結構時間がかかったな。
まあ、徒歩だししょうがないか。

「「まてーーい！！」」

ん？誰かと思えばあいつらは…

「何者だ、貴様ら！！」
「奇怪ない出立ち、しかも二人ほど死神と見える！！」

「「ふぉー！！」」

「「怪しい奴らめ！！この金彦（こがねひこ）と銀彦（しろがねひこ）が貴様らを決して通しはせぬ！！」

「ああ、やっぱりお前らか。俺だよ俺」

「ん？…善信殿！！！！！」

驚きすぎだろお前ら。ってか俺って以外に顔効くな。

まあ、ここは俺を知ってて当然だけど。

「いやはや失礼しました。まさか、善信殿や夜一殿とそのお供とは露知らず」

「いや、俺たちにも先に連絡しなかった責任はあるからな。気にすんなよ」

「いや～さすが偉大な方は御心が広い！」

夜一さんはともかく、俺はそこまで偉大だとは思わないんだが。

「ではこちらでお待ちいただいて〜パンパン！〜はっはい！」

いよいよか…

「はいっただいま！空鶴様！」

そういった金彦により開けられたふすまの向こうにはやはりあいつがいた。

「よう、久しぶりじゃねえか。夜一、善信」

「ああ、久しぶりだな。空鶴」

「「「「くっ空鶴って女ぁ～！！」」」」

ああ、そういえばこいつらはこの時はまだ勘違いしてたんだっけか。
それにしても本当に久しぶりだな。

「誰も男とは言ってないぞ」

「ん？なんだぁそのガキどもは」

「ああ、こいつらは「善信、おぬしは下がっておれ」分かりました」
夜一さんは俺の気を察したのかそういってくれた。
でもけじめはつけねえと。

「なあ空鶴、後でちょっと話がある。いいか？」

「…ああ、いいぜ。外でちょっと待ってろ」

俺はそう言い残し、外に出た。

十分ほどたっただろうか。空鶴は面倒くさそうに外に出てきた。

「で、話ってのはなんだ。つまんない話だったらぶっ飛ばすぜ」

「ああ、そうだな…」

{……}

だらだらと沈黙が続いている。切り出せないとは情けないぞ、俺！！！！！」

「ああ、鬱陶しい！さっさと話しやがれ！！何もないなら帰るぜ！！」

「いや…海燕の事、本当にすまなかった！！！！！」

俺は思わず土下座する。こんなことで許されるとは思っちゃいないが。

「なんだ。そんなことかよ」

「そんなことって！？」

「もういいんだよ。もう終わったことだ。嘆いてもしょうがねえだろ。

それに、お前以外にも京雲の奴も来たしな」

「京雲の奴まで…だが！！」

「いいんだ。それ以上言うと殴るぞ！」

「…分かった」

「それよりかわいそうなのは岩鷲の奴だ。あいつは自分の兄が目の前で殺されたんだからな」

「っ…」

「だが、今はそんなことより朽木を助けることが先決だ。それは分かってるな？」

「…ああ」

「じゃあオレは先に戻るぜ。あのガキどもの面倒を見なきゃなんねえからな」

そういって空鶴はだるそうに家の中に戻って行った。

俺もなるべく気持ちを切り替えて、家へ戻った。

志波家（後書き）

今回の話は、のちの話に関係してくる話です。
海燕の死を巡って出てきた”京雲”という人物はだれなのか。
まあ、修正過多の部分があるのでどうなるか分かりませんが
頑張りたいと思います。

感想、評価、誤字報告、ミス報告等をお待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4097w/

BLEACH　the Free World

2011年10月28日07時09分発行